

国際シンポジウム

宗教多元主義と対話の課題

西洋・中東・日本

鷺見朗子
SUMI Akiko

2007年5月31日と6月1日、国際シンポジウム「宗教多元主義と対話の課題—西洋・中東・日本」がチュニジア高等教育・科学技術調査省と教育訓練省の後援のもとに、チュニジアのスースにおいて開かれた。同シンポジウムは、南山宗教文化研究所、スース大学、The Ben Ali Chair for Dialogue among Civilizations and Religions (Tunisia), The Center for Research and Study on Dialogue of Civilizations and Comparative Religions (Tunisia), The Society of Tunisian Alumni of Japanese Universities の共催で行われ、国際交流基金、在日本国チュニジア大使館、同志社大学一神教学際研究センター、カリフォルニア大学 Walter H. Capps 倫理・宗教・公共生活研究所（米国）、宗教情報センター（日本）からの援助によって実現した。会場は首都チュニスの140キロ南に位置するスースに近い、地中海に面したポート・エル・カンターウィーにあるエル・ムーラディー・ホテルであった。

シンポジウム実行委員会によると、シンポジウムの目的は地球上の人々、とりわけ若い世代が、文化的理解を深め、他の文化を受容する意志を育くむことであった。宗教の研究とは寛容と平和的共生を探求するものである。諸研究機関の国際的なネットワークを通じて、人々は宗教多元主義について地球規模の対話を繰り広げ、多様性と普遍性を祝福する感性を磨いていかなければならない。このシンポジウム開催によって世界の相互理解と寛容の精神が促進されることを願う。

シンポジウムの参加者は世界9カ国（ブルガリア、フランス、日本、レバノン、オランダ、チュニジア、英国、トルコ、米国）から集ったさまざまな組織、研究所、大学の関係者であった。約35名の発表者とコメ

ンテーターが宗教に関連する多様な主題を提起し、聴衆の関心を引いた。英語、フランス語、アラビア語の3ヶ国語が使用され、同時通訳とともに進行した。活発な議論に現地のメディアも敏感に反応し、ラジオや新聞でシンポジウムの盛況ぶりが報道された。

プログラムはオープニング・セッション、アカデミック・セッションⅠ、アカデミック・セッションⅡ、クロージング・セッションから成り、ここではオープニング・セッションとクロージング・セッションから各々いくつかの報告とアカデミック・セッションⅠⅡの全報告について要約を記す。

1. オープニング・セッション

開会にあたり、スース大学長である Ahmed N. Helal 氏が、シンポジウム開催の主な目的は、学究的な意見を交わすことにより世界の異なる文明と宗教間に対話を育むことであると述べた。

東京大学教授の島蘭進氏から日本の在家仏教教団である立正佼成会の創立者庭野日敬（1906 - 1999）の仏教平和主義に関する報告があった。庭野は過去数十年間日本でもっとも影響力を有する宗教指導者のひとりであっただけでなく、世界宗教者平和会議の創設と発展に尽力するなど国際的にも活躍した人物である。庭野にとって、平和とは人と人との間そして人と自然との間に調和が保たれている状態を意味し、安らかな心（peaceful mind）とは仏教の慈悲心（benevolence）とキリスト教の愛（love）にあたる。彼の目標は各宗教が力を合わせることで、すなわち組織的な協力だけでなく、お互いに理解し手をつなぐことによって世界に平和を実現することであった。庭野の仏教思想は楽観的すぎるくらいにも否定できな



いが、彼の平和運動は現代の宗教運動として注目すべき成果をあげたといえる。

Warwick 大学（英国）教授の James A. Beckford 氏からヨーロッパ・イスラーム間の相互関係における最近の変化について報告があった。ヨーロッパにおけるイスラームを概括的に述べることは難しい。なぜなら、ムスリムが経験してきたことが多様であるのみならず、ヨーロッパの文化、宗教、政治、経済、歴史もまた多様な道筋をたどってきたからである。さらに、彼らの経験のいくつかは、彼らがイスラームの信者であるということよりも移民であることや民族的なマイノリティであるという不利な身分が関係している。彼らは自身の宗教的、文化的、政治的な利益を求めて、ボランティア的、商業的、専門的な活動に積極的に参加し、政府機関とも公的な関係を築いている。にもかかわらず、ムスリムに対する疑惑、敵意、差別、偏見、暴力は明らかに増加している。英国とフランスの囚人の例

に見られるように、ムスリムのヨーロッパの経験は非常に多様であり、ムスリム・コミュニティをとりまく内的要因、外的要因の影響下にあるといえる。

2. アカデミック・セッション I

London School of Economics（英国）の Effie Fokas 氏から「変化するヨーロッパの宗教風景のなかのイスラーム」と題した報告があった。ヨーロッパの世俗性に疑問を投げかける研究が紹介された。すなわち、ヨーロッパには強い信仰が存在し、それは特にキリスト教に見られる。人々はさまざまな形で「信仰」している。伝統的な宗教団体に所属する信者もいれば、所属しない信者もいる。宗教はいわゆる「記憶の連鎖」と呼ばれる集合的な記憶の形をとって生き延びてきた。この文脈において、ヨーロッパにおけるイスラームの存在は、キリスト教的なヨーロッパのアイデンティティ概念と世俗的ヨーロッパの概念に対するおそれるべき挑戦とみなされてきた。たとえば、イスラームとヨーロッパ間の歴史的な諸戦争はヨーロッパ人がムスリムに対して抱く否定的なイメージ形成に寄与した。この否定

的イメージはここ最近とみに大きくなっている。Fokas 氏はほかの研究にも依拠しながら、ヨーロッパの「世俗的中立性」の概念がいかに公的空間で疑義を呈されてきたのかを示した。イスラームはヨーロッパの宗教的な方向性が流動する時代にヨーロッパに入ってきた。ヨーロッパが見せる反応は、ヨーロッパにとって一般的な宗教とヨーロッパにとって特別なイスラームとの弁証的な関係を提示しているといえる。

L'Université de Lyon 2（フランス）の Nancy Venel 氏からヨーロッパのムスリムに関する報告「ディスプレイとしてのイスラーム？—北アフリカ出身の若者の社会・政治的経験」があった。研究目的はフランス人ムスリムが自身のアイデンティティをどのように定義し見定めているのかを検証することであった。報告はフランスでイスラームが定着した背景と、フランスのムスリムのアイデンティティと宗教的实践に焦点をあわせ、その多様なあり方を提示した。350万～500万人と推定されるムスリム人口はフランスにおいて最大の宗教マイノリティである。フランスへのムスリム移民の60～70%はアルジェリア、モロッコ、チュニジア出身者である。次に占めるのがトルコお



よび西アフリカからのムスリム移民である。Venel氏はマダガスカル出身で両親がともにムスリムであるムスリムの若者50名と1対1のインタビューを行い、彼らがどのように市民としての役割と市民権を考えているのかを調査した。インタビュー後、彼らを次の4つのタイプ(1) the French devotees, (2) the conciliators, (3) the contractualists, (4) the neo-ethnicsに分類した。この分類は作為的なもので必ずしも現実を反映するものではないと説明しながら、それらムスリムのイスラームとの接し方と彼らの国家的遺産の捉え方に大きな多様性があることを示した。最近の研究によると、フランス生まれのムスリムの多くが彼らの両親よりも信仰深いことがわかっている。Venel氏はこの現象をイスラームのリバイバルとしてではなく、ムスリムの特殊な意識の形成として捉えている。ムスリムのアイデンティティ形成の理解には、他者が彼らを見る眼を考慮しなければならない。他者が彼らに対して抱くイメージは彼らがコントロールできないものであり、彼らはイスラームに関するイメージをまわりから押し付けられているといえる。また、彼らの所属に関する主張は実際の宗教的経験と結びつくものではない。それゆえ、現在私たちの眼前にあるイスラームはディスプレイとしてみるべきであってイスラーム復興としてみなすべきではない。

宗教情報センター(日本)の葛西賢太氏は日本のムスリムについての報告を行った。日本に居住するムスリムの多数は主にマレーシア、インドネシア、パキスタン、バングラディッシュ、トルコから来ている。日本校教師が行った世界史を教えている高校生がイスラームに対して抱いている誤解についての調査が紹介された。その調査に

よると、イスラームに関する知識がほとんどない生徒はイスラームに否定的なイメージを抱いていない。他方、イスラームに関して知識がある生徒は否定的なイメージを抱いている。生徒がよりバランスのとれたイスラームのイメージを抱くためには、イスラームに関与する世界歴史の教科内容が再検討されなければならないであろう。葛西氏は日本におけるイスラームの歴史について述べた後、日本のムスリムは次の6つのグループに分類されると述べた。(1) 訓練を受ける短期滞在者、(2) 専門的技術を持たない労働者、(3) ビジネスマン・貿易業者、(4) エリート・ムスリム・学生、(5) 改宗した日本人ムスリム、(6) 布教師である。これらの6つのグループは日本社会での彼らの生活状況に応じてそれぞれ異なる扱いがなされなければならない。各グループの利益にかなうようにそれぞれに適した対応を行うことは、ムスリムと日本人のあいだの友情を深め、相互の評価を高めることにつながるであろう。また、報道と教育を通じてイスラームについて偏見のない情報を日本社会に広めるべきである。

3. アカデミック・セッションⅡ

中東を論じたこのセッションはThe University of Sfax(チュニジア)のHajer Ben Hadj Salem氏による植民地時代後のチュニジアにおける宗教多元主義の誕生を検証した報告で始まった。チュニジアはマイノリティとしてのキリスト教徒とユダヤ教徒を抱えるムスリム国家である。チュニジアの創設者たちは50年前、まだ外国からの圧力がかかる以前に、すでに宗教多元主義を主唱していた。そうすることで国内の宗派的分割とマイノリティの権利を含む宗教多様性のバランスの確立をはかったのであ

る。さらに、創設者たちは国内でイスラームの地位を保持することに専心した。彼らの努力はイスラームの普遍性と啓発性をともに再保証するものであり、いかにイスラームの基本的教義が近代化する多元的社会内で用いられているかを提示している。Ben Hadj Salem 氏の「多元性」の定義は西洋の概念に基づいており、多様性の受容と奨励として理解されている。「多元性」は与えられるものではなく、達成するものである。さらに、多元性確立のためのさまざまな仕組み、たとえば個人の地位の規約、憲法、教育と社会の近代化などの問題が示された。結論としていえることは、社会は内省、教育、そして吸収を通して寛容のプラスの価値を育んでいかねばならないということである。イスラームを強固にすることで成功したチュニジアはよきモデルの例となるであろう。

The University of Sousse (チュニジア) の Mabrouk Mansouri 氏から宗教学の分野の1つとしての比較宗教学の重要性を説く報告があった。まず、北アフリカの研究者らによって進められた近代の知的な言説が紹介された。それらの言説は特にフランス占領から独立を果たした後の文化的アイデンティティの確立への多くの挑戦に対する返答であった。たとえば、モロッコの知識人らはイスラームをキリスト教、ユダヤ教と比較することで宗教関連の主題を再検証した。次に、比較宗教学の概念と比較宗教学を推進する根拠が探求された。ユダヤ教、キリスト教、イスラームは多元的社会においてともに利益と不利益を被っており、それらを比較することにより多文化的な視点が拡大されるであろう。Mansouri 氏は中東における諸預言者の比較、そしてイスラーム、ユダヤ教、キリスト教の歴史的発展のなかでの倫理、法律学、神学の諸問題の論じ方

の比較を提案した。現代アラブの比較宗教学の見解は限られており、チュニジアでの新しい試みを除いては、アラブ地域の比較宗教学のプログラムを有するいくつかの大学の研究は比較学の現在の動向を反映していない。相互理解促進につながる比較宗教学は、諸宗教の知識を深めることに役立つであろう。

Notre Dame University (レバノン) の Ziad Fahed 氏から「レバノンの宗教多元主義と宗教間対話」と題する報告があった。レバノンは宗教宗派を土台に構成される社会である。レバノンには18もの宗派が存在し、宗派主義が政治体制の核となっている。異なる宗教集団が共生していることから、そこでは真の「生活の対話」がなされる。しかし同時に、この構造は指導者らにたやすく政治的に利用されるものでもある。レバノン内戦の間接的要因の1つはこの宗派主義であった。Fahed 氏が問いかけた質問は「レバノンは宗派的抗争が起こっているにもかかわらず、異なる宗教文化が凝集したモザイクとして生き残ることができるであろうか」、「古い宗教共同体がいかに近代国家建設に寄与できるか」などである。レバノンの宗派別人口構成に関しては、ムスリムの増加に伴い、キリスト教徒が減少していることが示された。現在直面している課題を克服するため、レバノンは内戦によってもたらされた怒りと暴力の「記憶の浄化」を行い、宗派間をつなぐことで差別と不寛容に対する「市民社会の行動」を推進していかなければならない。

4. クロージング・セッション

同志社大学(日本)一神教学際研究センター長の森孝一氏はさまざまな宗教の共生のためにはそれらの「manners of



disagreement」に関してコンセンサスに達しなければならないと説いた。「宗教的真実」と「普遍的価値」に関する論議をやめて、お互いの相違を評価すべきであり、他者を自分たちの信念と価値観に同化させようと試みてはならない。一神教の研究に従事するセンターの長として、日本でアブラハムの3宗教について研究と教育を行うことに大きな重要性を感じている。日本は常にこれらの3宗教間の対立の歴史の外側にいた。この中立性ゆえ、日本は異なる諸宗教と諸文明のあいだに平和と相互理解を促進するための調停者となりえる。同志社大学のプログラムが世界の平和と安全の成就に貢献することを願う。

南山宗教文化研究所長の Paul L. Swanson 氏は多様性を評価することの必要性を再確認した。世界は権力、金、暴力、憎悪、対立を求める闘争に明け暮れている。われわれが多様性、多様性、対話、共生と平和への希望を語るこのような会議をぶな楽観主義に基づくむなししい試みに過ぎないと見る

人もいるであろう。そのような反応に遭うとたやすくくじけてしまう。しかし、われわれは絶望に対して「ノー」というべきである。森はゆっくりと確実に大きくなるが、1日で破壊されることもあるだろう。それでも、われわれは多様性を歓迎し、共生の根を大地に這わせるべきである。

シンポジウムはチュニジア教育訓練大臣 Sadok Korbi 氏によるスピーチで幕を閉じた。大臣は西洋、中東、日本の宗教多元主義に関する討論がチュニジアで行われたことに喜びを感じ、このシンポジウムが共生と平和の成就に寄与することを確信すると語った。

今回のシンポジウム報告には、そのタイトル「宗教多元主義と対話の課題」を議論すべく、現実を反映する「多様性」に焦点をあてたもの、また異なる宗教に「共通性」を見出したものがあつた。他方、いくつかの報告は「多様性」を「多元主義」に変えることの大切さを訴えた。筆者もチュニジアから戻って以来、この課題を克服してい

くために日本が貢献できることは何であろうかと時折考えるようになった。世界の人々と、どのように、またどういう形で、協力していくのかを、わたしたちが再考慮し、それを実行していかなければならないのではないだろうか。

最後に、南山宗教文化研究所とスース大学の関係者に対して、筆者をアカデミック・セッションのコメンテーターとしてこのシンポジウムに招いてくださったことに心から感謝の意を表したい。アラブ文学を専門とする筆者にとって、このシンポジウムがアラブ・ムスリムの国で開催されたことは望外の喜びであった。また、フォーマルな

報告と議論のみならず、インフォーマルな意見交換にも多くの収穫をえたシンポジウムであった。比較的小規模で行われたことで、参加者同士のなかに友情と信頼の芽が育まれたように思う。心に残っているのはシンポジウムの最後の夜、カンターウィー港のマリーナにあるアラブ・カフェでほかの参加者と過ごした、楽しいお喋りのひと時である。地中海からのさわやかな潮風と暖かい雰囲気になんともいえない心地よさを感じ、この交流を将来も深めていければと切に願った。

鷺見朗子
南山宗教文化研究所非常勤研究員
京都ノートルダム女子大学准教授